

開催地名	岡山県 玉野市
開催日時	令和7年2月8日(土)14:00~15:30
開催場所	玉野産業振興ビル3F会議室
語り部	甲木 喜一郎(熊本県荒尾市)
参加者	玉野市民等 54人
開催経緯	本市では、自主防災組織率71.7%(R6.4.1現在)と岡山県内の他市に比べ、低迷しており、未設置地域への設置促進が急がれる状況である。また、各自主防災組織のリーダーとなる防災士同士の連携をさらに強化する必要があるので、被災地でのボランティア活動等の実体験の話を直接聞くことによって、さらなる地域防災力の向上をめざしたい。
内容	■ はじめに 講演者は熊本県荒尾市在住で、荒尾市防災士会幹事長として活動するほか、荒尾市社会福祉協議会の生活ボランティアにも従事している。2023年6月からは消防庁の防災意識向上プロジェクト「語り部」としても活動し、各地で防災の重要性を伝えている。 これまでに、2016年の熊本地震や2017年の九州北部豪雨での災害ボランティア活動を経験しており、現場での実体験を通じて学んだ防災・減災の視点を共有している。 ■ 南海トラフ地震への備え 南海トラフ地震は、30年以内に70~80%の確率で発生するとされており、事前の備えが不可欠である。避難の際に重要となるポイントとして、以下の点が挙げられる。 地震発生時の備え ・家具や家電の配置を見直し、転倒防止のために突っ張り棒などを活用する ・家族と避難計画について話し合い、避難ルートや集合場所を決めておく 避難時の行動 ・ガスの元栓を閉める ・ブレーカーを落とす ・避難グッズを玄関など取り出しやすい場所に置いておく 津波避難の三原則 ・「想定にとらわれない」… 東日本大震災では、避難所として指定されていた小学校が津波に襲われた事例がある ・「最善を尽くす」… 避難所においても安全とは限らず、より高い場所を目指して避難を続ける必要がある ・「率先避難者となる」… 自ら率先して避難行動を取ることで、周囲の人も避難するきっかけとなる また、避難後の生活を支えるためには、自主防災活動が重要となる。行政にすべてを頼るのではなく、地域住民が主体的に行動し、防災対策を進める必要がある。 ■ 自主防災活動と地域防災の視点 過去の地名には、土地の特性や災害の歴史が反映されていることが多い。「とどろき」や「むた」といった地名には、災害に関する由来がある場合があり、これらを参考にハザードマップを確認することも重要である。 しかし、最終的に自分の命を守るのは自分自身であり、「自助」の意識を持つことが不可欠である。一方で、防災は公務員や議員にとっても重要なリテラシーであり、住民だけでなく行政全体が防災意識を高める必要がある。 また、災害発生時には行政の対応にも限界があるため、地域住民同士の助け合い(共助)が求められる。阪神・淡路大震災では、救助された人の約77%が近隣住民によるものであり、行政や消防、自衛隊による救助は約23%にとどまった。このことから、地域のつながりを強化することが、命を守る上で極めて重要であると分かる。 ■ 地域資源の活用と防災の仕組みづくり 地域防災を強化するためには、行政だけでなく、地域の事業者や住民も積極的に関与することが求められる。例えば、大工が家具の固定を担う、ビルを避難所として活用する、道路の水捌け

	を改善するためにグレーチング(排水溝の格子)を整備するなど、地域の持つ資源を有効に活用することで、防災力を向上させることができる。 また、地域コミュニティの結びつきを強化するためには、日常的なつながりが重要であり、普段の挨拶やコミュニケーションを大切にすることが、防災力の向上にもつながる。「隣組」など、かつての地域の助け合いの仕組みを現代の形で活用することも有効である。 ■ 避難行動と避難所運営 避難行動については、以下の点に注意する必要がある。 ・避難所までのルートを実際に歩いて確認し、1つではなく複数のルートを確保しておく ・グループLINEなどを活用し、情報共有の体制を整えておく ・災害発生時に、最初に声を上げる人になることが大切 ・避難所だけでなく、事務所ビル、お寺、ホテルなど多様な避難場所を確保する また、自主防災組織の役割を明確にすることも重要であるが、高齢化や仕事の忙しさによって、活動に参加できる人が限られることも課題となる。そのため、担当者を固定せず、集合した人の中から優先順位を決めて役割を振り分けるなど、柔軟な運営体制を整えておくことが求められる。 さらに、災害時には男性だけでなく、女性も防災活動に積極的に関与することが不可欠である。避難所における女性の視点を取り入れることで、以下のような課題を解決することができる。 ・更衣室の設置 ・洗濯物を干す場所の確保 ・トイレの明るさや衛生環境の改善 ・炊き出しの役割分担の見直し ■ まとめ 防災活動は、決して難しく厳しいものだけではなく、「楽しんでやること」が重要である。例えば、河川の土手を踏み固めるために、桜を植えて花見をするイベントを開催することで、多くの人を集めつつ、防災意識を高めることができる。このように、防災を日常の中に取り入れ、地域のつながりを深めながら継続的に取り組んでいくことが重要である。 最終的に、防災は「自分のため」「家族のため」「地域のため」、そして「未来の子どもたちのため」に行うものであり、事前の備えが災害時の命を守る鍵となる。防災意識を高め、地域全体で支え合う仕組みをつくることが、安心して暮らせる社会を実現するための第一歩となる。  
開催地より	被災地での実体験を体験している語り部の話は、非常に具体的で、わかりやすく、今後の自主防災組織等の自主的な活動の指針を考える上で、大いに参考となった。今後は、避難訓練など地域での防災活動に活かしていきたい。